海外だより

マニラ市の五日間

——ISSA，アジア・オセアニア円卓会議から——

トピー健康保険組合　島村彌蔓

I

「健保連の推薦で健保関係の国際会議に出席してみませんか。」と健康保険組合連合会東京支部から勧誘を受けた。

一健保組合の理事長の職を汚してはいるものの，仕事といえば日常目先き的なことばかり，政策立案に参画したことなど一切無いのだから，その任でないことは自明。一応も二応もご辞退した。

しかし，ついでにいろいろ伺ってみた——

国際会議というのはＩＳＳＡ（国際社会保障協会）の会議で，正式に言うと，「アジア・オセアニア地域諸国における医療組織に関する円卓会議」，10月14日から18日まで５日間マニラで開催されるとのこと。

ご承知のように，ＩＳＳＡは社会保障に関する自主的国際団体であるが，ＩＬＯ（国際労働機関）が事務的に協力することになっており，ジェネヴァに本部が在り，「社会保障の技術および管理上の改善を通じてその維持および発展を図るために，国際水準において協力すること」（社会保障年鑑1974年）を目的としている。そのために，各種専門委員会のほか，随時諸種の国際会議，セミナー等を開催し，技術および経験の交換比較，技術的相互援助等の活動を行っている。

会員は社会保障を管理する政府部局ならびに各種団体中央会ないし連合会より成り，正会員，準会員に分れ，わが国からは，正会員として社会保険庁，労働省，健康保険組合連合会，国民健康保険中央会，厚生年金基金連合会，国鉄共済組合の６機関団体，準会員として社会保障研究所，財団法人船員保険会，社団法人全国社会保険協会連合会，財団法人厚生団の４団体が加入している。

随時開催される国際会議は目的，議題，開催地を異にし，たとえば1972年11月にヴィエナで第２回社会保障調査会議が，1973年３月にアフリカ・トーゴー共和国でアフリカにおけるフランス語使用国社会保障機関長シンポジウムが開催された，というふうである。

II

今回参加招請に応じた厚生省関係からは田中保険局医療課長，健保連から社会保障研究室一圖氏，および組合代表とでもいった形で，私が参加することになった。

戦時中応召してマレー半島，シンガポールには行ったが，フィリピンは未知の地であったことも参加を決心した原因であった。

雨の羽田を出発して４時間で午後３時半（現地時刻）マニラ国際空港着陸（時差１時間遅れ）。南国の陽がギラギラ輝いていた。10月は雨季の終る季節なのだが，まだ完全には終っておらず，台風の去った直後だと言う。

狭い空港ビルには送迎客が文字通り溢れており，ビルの外もお祭騒ぎのような物凄い人出である。縫うようにして出迎のフィリピン政府の係官の案内で飛行場の一隅に新築間もないホテル「フィリピンの村」に投宿した。

係官は「ジャパンが遅いので心配していた。搭乗便の通知がないので朝から張込んでいた」と言う。実は出迎を予期していなかったので，搭乗便の通知をしなかったのである。東京出発直前ではあるが，ホテル名の通知を受けたので，勝手に行くつもりであった。フィリピン人はなかなか親切なところがあるのだそうであるが，連絡不十分とか些か独断的なやり方が時にありがた迷惑と受取られることもあるようである。

さて，話によると，参加国代表は殆んど全員既に到着していて，皆同じホテルに部屋を割当てられている由。フィリピンの接待係も同宿。あとで判ったが，なるほど，連絡，輸送，警備等あらゆる点からしてひと纏めの方が便利というわけであろう。

マニラ市郊外のホテルから会議場までは北方約20キロ。警察の護衛車の先導で，我々代表のマイクロバスや役員，事務局の車が10台ばかりえんえん連なってノンストップの行進である。ちょうど朝夕のラッシュアワーにぶつかるのであるが，一般車は「止まれ」を喰って立ち往生。少し気の毒であった。この特別通行措置は昼食や晩餐会場，見学行など一切の送迎の場合にとられたのであった。

会議場は，マニラ市中心からは東方約10キロの新首都ケソン市の中心に在るＳＳＳビル二階の国際会議場「ラモン・マグサイサイ・ホール」である。

ケソン市はつとに1940年フィリピンの首府とされていたのであるが，人々が知ったのはここ数年のことだそうである。まだ建設途上で，将来首都の中心点として計画されている地点には雄大な通称「ケソン記念塔」がそびえていて，現在はそのまわりに若干の政府関係の建物が建っているだけ。戦時中および戦後米軍の施設が設置されていたと言うが，それも今は撤収され，跡は茫々たる草っ原のままである。そういうなかにポツンとこの十数階建のＳＳＳビルが遙かかなたからでも望見できた。

会議参加国はＡＢＣ順に，オーストラリア，ホンコン，インドネシア，イラン，日本，韓国，マレーシア，パキスタン，フィリピン，スリランカの10カ国の予定であったが，パキスタンおよびスリランカは代表派遣が実現せず，結局８カ国の代表12名であった。日本の３名を始めインドネシア，マレーシアは複数名の代表が派遣された。

アジア・オセアニア地域諸国としてＩＳＳＡ連絡員事務所設置国名を列記すれば，オーストラリア，ビルマ，スリランカ，フィジー，インド，インドネシア，イラン，イラク，イスラエル，日本，マレーシア，ニュージーランド，パキスタン，フィリピン，シリア，トルコ，ソ連の17カ国を数え，これらの諸国の機関は会員であるが，中国，台湾，北朝鮮は加入しておらず，また韓国（準会員），レバノン（正会員）および南ベトナム（正会員）には連絡員事務所はない。

Ⅲ

さて，開会式に先立ち，正面玄関前で参加各国の国旗掲揚式が厳粛に執り行われた。各国代表が旗綱を手繰り，これにフィリピン大学生予備役将校訓練隊員１名，ＧＳＩＳ女子従業員１名が付添い，警察音楽隊の伴奏でＳＳＳ両性合唱団が各国の国歌を斉唱する。この間配備の警察隊員は挙手注目の礼である。

私は日本軍占領中行われたであろうこの種の行事を想像し，また戦中戦後の反日感情を思出し，まわりの見物人（ＳＳＳに所用で出入りする）からブーブーといった罵声が上がるのではないかという想念が一瞬脳裡をかすめたことであった。

しかし，日の丸は折からの風に軽くはためき，南国の大気はむしろ爽やかでさえあった。

このあと会議場に入り，まずフィリピン国歌の大合唱（傍聴人多数）で開会式が始められた。

すべてこの種の行事は，再建に努力中のこの国として当然に，国家的に荘重な性質のものであった。

会議場は通常この種の国際会議場の形で，馬蹄形の代表用テーブルがあり，一方に議長団用高壇，その反対側は二階で傍聴席になっている。各国の国旗は壁ぎわに立てられた。なかなか広い議場で，500名ぐらいは悠に収容できると見られた。

さて，この会議は各国の経験の比較，情報の交換を主な目的とする「円卓会議」なので，報告者の報告が終ると，それに関し質問応答ないし討議が行われる。毎日午前１報告，午後１報告という次第で行われた。

午前は９時より１時間，午後は２時より１時間の報告。10時，３時から約30分間「コーヒー・ブレイク」と称する休憩があり，議場外のロビーでコーヒー，紅茶，ジュースにサンドイッチ，ケーキのサービスがある。このときいわゆる「ロビー

イング」が行われる。各国代表は毎回同じような顔触れらしく，「やあやあ」と旧交を温める。そこにゆくと日本の出席者は毎回異なるので，「まことに話がしにくい」とのことであった。

我々はめいめいできるだけ相手をつかまえて話を交わしたが，相手としては，再会の機会が無いとなれば，物足りないという感じも抱くであろう。何しろ，日本の情報を得たがっていること甚だしいものがあるのだから。

現に，アジア・オセアニア地域事務所（在ニューデリー）主任であるインド人のワダワン氏の如きは，健保連その他に知己が多いせいもあって，この種の会議を近く日本で開催してほしい旨しきりに訴願していた。これは他の代表達も同じであった。

従来日本の情報が与えられなかった筈はないと思うが，今回我々の携行領布した資料が大歓迎され，部数が不足したのも事実であった。

しかし，後述するように，今回のこのような主催国の準備を見ると，資金的にも時間的にも要員的にも大変な仕事であり，特に日本で開催するとなれば各国の期待も大きいだろうから，なおさら大行事とならざるをえまい。敬して遠避けていると勘ぐられても，やむをえぬ点がある。

とにかく，「ロビーイング」なるものはこの種の国際会議に付き物で，無くても大勢に影響はないが，あれば慣習的に華を添え，むしろ実質的に効果を上げるといった性質のものであろう。

こんなこともあった——

ＩＳＳＡの企画調査部長のリス氏が休憩時間に田中課長の許にやって来て，しきりに耳打ちしている。あとで田中課長に訊いたら，本年ＩＳＳＡ事務総長の改選があるそうで，立候補するのでその事前工作として，日本のＩＳＳＡ評議員に諒解方よろしく頼むということであったそうである。なかなかの策士で，一部にはとかくの批判もあるとか，尚のこと根廻しが必要というわけであった。

Ⅳ

さて，会議の報告，討議の内容については，健保連機関誌「健康保険」12月号，1月号に我々の報告として掲載され，また本誌（「解説」）にも一圓氏が紹介しておられるので，ここには省略させていただく。

ただ，私の印象に強く残っている問題は，医療供給方式における直接的方式と間接的方式との優劣論，医療保障（保険）財政の制御の問題，医師・看護婦の「国外流出」の問題等である。これらはびようたる一健保組合の理事長としても論じたい点が多々あるが，紙数の関係もあってここでは割愛するが，概して，発展途上国ないし後進国では保険方式より保障方式の方に賛成のようで，この論旨を推し進めて行けば直接方式の考え方になり易い。しかし，現実の問題として，そのようなやり方で万事解決ずみなどということは絶対にないことは，なんぴとも知っておかなければならないことである。

10月14日の午後から18日の午前まで，中途半日の見学行と最終日の午後の閉会式とを除き，７氏の報告が演べられ，前述したように，宣言とか決議とかいったものは無く，議事録の総纏めがなされて全会議は終了した。

ところで，主催国フィリピンがこの国際会議のためになした準備は実に広汎壮大，しかも微細な点まで配慮したものと感心させられた。もっとも，南方人によく見受ける鷹揚さのため連絡が遅れたり，「親切過剰」から面倒見がよすぎて，自由時間というものが殆んど与えられなかったり……といった憾みはあったが，一言にして言えば，大変な準備努力であったと認めざるをえない。

正式には，主催はＰＭＣＣ（フィリピン医療委員会），ＧＳＩＳ（政府職員保険機構），ＳＳＳ（社会保障機構）の三政府機関の共催で，これら機関の長，次長その他を以て組織委員会を組織し，その下に実行委員会，実行幹事，書記局，更に資金，施設，用度，接待宿泊輸送，社交行事，広報，警備，看護等の係を総てで13設けている。これらの各係には数名の幹部のほか，恐らく何十名の人が手足となって働いたことだろうから，全要員は大変な数に上ったことであろう。ど

のくらい費用が掛ったのか，知るすべもない。聞けば，この会議の前２週間ＩＬＯ関係の会議があったそうだし，翌週にも国際会議があると聞いた。大変な国際的行事の連続である。

この会議に華を添えたのはＧＳＩＳ女子従業員30名近くの「接待員」であった。

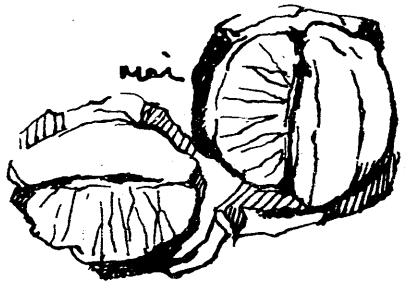
話に聞くと，彼女等は２ヵ月間ばかり特訓を受け，自国フィリピンの事情は勿論，参加各国の社会経済事情一般を勉強させられたとのこと。各自の好みに合せてドレスを２着お仕着せとして支給されていた。会議用の資料配布や連絡は勿論のこと，昼食，晩餐，コーヒーブレイク　時まで我々の接待に努め，共に語り共に飲み，隣席に着いて共に食事し，食後必ず有るダンスのパートナーを勤めてくれたのである。

発展途上国では政府機関に就職することは高級職業であり，従ってまた教育，能力が必要とされ，当然良家の子女と想像された。私とよく同席した彼女はアメリカのハイスクール卒業であったし，他の１人は姉が東京のフィリピン大使館に勤めていて，２回東京に行ったことがあると誇らしげに語っていた。更に他の１人は，父が政府に勤めていて日本に行く機会があるのでその時は同行したい，と希望に胸を膨らせていた。

20数名の彼女等だが，２日目あたりからなんとなく「相手」がきまってしまって，別の彼女と「付き合い」たくてもお互に遠慮せざるをえないふうであった。最近のフィリピン政府の慣行になったとのこと。日本の国際会議では見られない「接待員」諸嬢であった。

ご承知のように，フィリピンは嘗て利権，買収，裏面工作等政治の腐敗が甚だしく，ご多分に洩れず学生運動が激化し，他方，南部地域でイスラム教徒の反乱の度が昂じた。そこでマルコス大統領は1972年９月戒厳令を布いて議会の機能を停止する国家非常措置を執り，更に労働組合の権利も停止し，過激学生を投獄した。

その後国内の治安は急速に改善され，白昼からホールドアップ襲撃のあったような無頼町も今や全く平安を取戻した。大統領は「警察というものは人の社会生活に必要なものだ」と言明している。言うなれば，マルコス大統領の独裁的警察国家である。しかし，とにかく人心は落着き，生業に従事している。勿論不平不満分子や反対派はいる，しかし大統領は総力を結集してフィリピンの再建に先頭に立って挺身していると観た。

結果は今のところ良い。しかし，イスラム教徒問題はなかなか根深いものがあるし，独裁制というのは自然の成り行きとして強権主義の弊害を伴なう。

私はマルコス大統領の英智と進歩性とに期待しつつ，フィリピンの今後の発展を視まもりたいと思う。